

# 族的資本主義の英雄時代

## —パプアニューギニアにおける ビジネス文化進化史—

塩田 光喜

太平洋のタイガー・エコノミーと呼ばれるパプアニューギニア

(PNG)は、二〇〇二年の総選挙後に成立した、建国の父マイケル・ソマレ氏を首班とする国民同盟政権二期の一〇年間、年平均八%の成長を続けてきた。そして来年、操業が開始される巨大ガス田、ハイデス・ガス・フィールズ(エクソン・モービル)は、三年後にPNGのGDPを倍増させると予測されている(日本にも東京電力と大阪ガスに供給される)。

こうした驚異の経済成長は、むしろ石油とガスの上に黄金(ゴールド)が浮いているといわれるほどに恵まれた資源に負うのだが、それではPNG人は何の寄与もしていないのかといえば、そんなことはない。PNG人のビジネスへの熱狂とそのキャパシティーなしには、二一世紀を迎えたこのタイ

ガー・エコノミーは成立し得なかつたのだ。

人口七〇〇万のPNGは、豪NZを除く太平洋島嶼諸国民一〇〇〇万中七割の人口を保有し、人口四〇〇万のニュージランドを凌駕し、富士山型のその美しい人口曲線は、二〇三〇年には一〇〇〇万に達しようという勢いである。そして、二〇三〇年にはGDPにおいてもニュージランドを抜いてオーストラリアに次ぐ太平洋第二の経済大国となるであろう。

我々は、その経済発展の担い手となるPNGビジネスマンの生態に肉迫してゆこう。

### ●貨幣経済の誕生

パプアニューギニアの文明史は、一八八四年ドイツとイギリスが海岸線だけが描かれた白地図の上に境界線を引いた時に始まる。

北半はドイツ領とされ、ノイ・ギニア(ニューギニア)と命名され、南半はイギリス領とされ、パプアと名づけられた。合わせてパプアニューギニアである。

その時、PNG全土は石器時代の部族社会である。

金属器もない、文字もない、国家もない、世界宗教もない、もちろん貨幣経済もなかった。あったのは、プロニラフ・マリノフスキーの民族誌の古典『西太平洋のアルゴ船隊』に描かれたクラ交易にみられるような「贈与交換」である。

そうした石器時代のPNGに最初に入っていった白人達は植民地官吏、人の魂を求める宣教師、黄金を求める山師、コブラ(ココヤシの実を乾燥させたもの、マーガリンや石けんやダイナマイトの原料)栽培のプランター(入植者)、そして人類学者であった。

PNG文明史を語り出したらきりがない。我々は目盛りを一九三〇年代に合わせ、標高一二〇〇メートルを超えるニューギニア高地に赴こう。

第一次大戦は終わり、PNGはオーストラリア統治下に入りゴルド・ラッシュが始まっている。

それまで無人の地だと思われていたニューギニア高地にゴルド・プロスペクターのマイケルとダンのレイ兄弟と植民地統治官のジム・テラーが東西三〇〇キロを踏破し、PNG全人口の四割を占めるニューギニア高地民を「発見」する。

例によって、統治官と山師と宣教師が入ってくる。

白人達はニューギニア高地民の宝にして贈与財であった真珠母貝しんじゅもががの大きな貝片を大量に飛行機で運びこみ、ブタやサツマイモなどの食料や人々を働かせる対価として与えた。

だが、一九四二年、大日本帝国軍がオーストラリア領パプアニューギニアに侵攻、オーストラリアのニューギニア支配は中断する。日本軍はニューギニア中央高地にまで兵を進めることはできなかったが、白人統治は一九四六年

まで断ち切られた。

戦後のニューギニア高地統治の衝に当たったのが、一九三三年レイ兄弟とともにニューギニア高地を東西に横断したジム・テラーこと、ジェームズ・リンゼイ・テラーであった。

ジム・テラーは、それまでの真珠母貝の貝貨を使うのはやめ、オーストラリア紙幣（当時はポンド）を通用させ、ニューギニア高地に貨幣経済を持ちこもうとする。

だが、ニューギニア高地民にはポンド紙幣とタバコを巻く新聞紙の違いがわからない。食物や労働の対価として与えられた紙幣はいたずらに退蔵されるばかりであった。

こうして退蔵されたポンド紙幣にハケ口を与えたのは、レイ兄弟の次兄ジムであった。ジム・レイはテラーが統治本部を置いたゴロカ・ステーションに、一九四八年、ニューギニア高地で初めてのトレード・ストアー（万屋）を開いた。ジム・レイはニューギニア高地民の熱望する真珠母貝の貝貨や鉄斧、鉄製の山刀を並べ、ポンド紙幣と交換に「売った」。

テラーがニューギニア高地民に与えた二八八〇ポンドはわずかに六日でそっくりそのままジム・レ

イの手によって回収された。

だが、ニューギニア高地民に、ポンド紙幣には「値打ちがある」と思うようにさせるにはそれから更に一〇年を要した。

ここでも、先頭を切ったのはジム・レイである。ジム・レイは高地民から土地を「買い」、そこにコーヒイの木を植えていった。一九四八年二月のことである。

一九五二年七月、ジム・レイはコーヒイ豆の最初の収穫を行った。ジム・レイは幸運に恵まれた。当時のコーヒイ豆の売値は一キロ一・六ポンド、コーヒイ価格のピークに当たっていた。その記録は長く抜かれることなく、一九六八年になっても、その半値に達するの

がやっとである。ジム・レイの成功はPNG在住の白人達の間でコーヒイ入植熱の火を点けた。ニューギニア高地統治の衝にあつたジム・テラーですが、職を投げうちコーヒイ栽培を始めたほどである。ジム・テラーの副官であったイアン・ダウンスはこう記している。「雰囲気は戦前、金が発見された当時のように熱狂的なものだ。違うのは、今回はゴールド・ラッシュではなく土地ラッシュだという事だ」。

こうした白人達の熱狂はニューギニア高地民に好奇と懐疑の念を抱かせずにはおかなかった。「連中は、なんで俺達の土地を手に入れ、奇妙な木を植えていくのか?」と。

ゴロカ近傍の高地民達は、ジム・レイに倣って統治府の指導のもと、コーヒイを植え始めた。そして、一〇年後の一九六二年にはニューギニア高地には二〇〇万本のコーヒイの木が植えられていた。

一九五二年には八〇〇〇USDドルであったPNGのコーヒイ輸出額は、一九五五年には二〇倍近い一五万USDドルに、一九六〇年にはそれを更に九倍した一四三万四〇〇〇USDドルに増え、その間の平均成長率は年平均八〇%にも及んだ。一九七〇年にはついに二〇一八万二〇〇〇USDドルに達し、そのうち高地民のコーヒイ生産は全産出額の七八%に達していたから、ニューギニア高地にはコーヒイだけで一六〇〇万USDドルも

の貨幣が流れこみ、流通を始めたわけである。ジム・テラーがポンド紙幣をニューギニア高地に導入してから二二年後、その流通量はコーヒイだけで数千倍に達したのである。それは人類史上、空前絶後の経済

成長であった。

### ●アイエ・ウインディー族的資本主義の英雄

こうして、一九七五年の独立までに人口一五〇万のニューギニア高地の隅々に至るまで、貨幣経済は浸透した。それにともなつて、「ビジネス」という単語が、ニューギニア高地の全民族の言語に加わった。

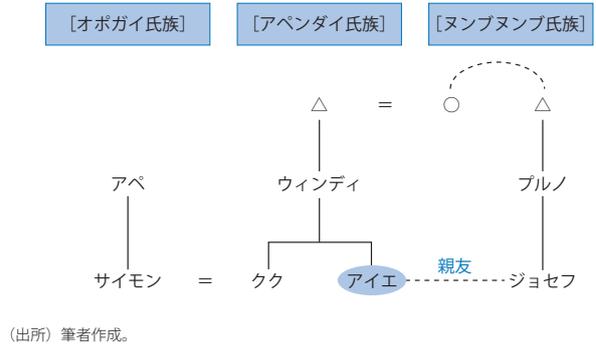
ビジネスに対するニューギニア高地民の熱狂と情熱はすさまじいものであった。そして、ニューギニア高地民は天性のビジネスマンであることを証明しつつあった。それがどのようなものであるかを、私は一人の典型的な人物を通して描いてゆこう。

彼の名はアイエ・ウインディー。私のインボング族フィールドワークのホスト・ファミリーの一員である。

アイエは一九六七年に生まれた。インボング族は一九五三年に白人により平定 (pacify) されているから、文明到来後に生まれた文明第二世代である。

氏族はアペンダイ氏族、生まれたのはアンブル村だが、父ウイ

図1 相關図



ンディは自らの母の出生地ポネモンゴ村に移動し、アイエは少年時をポネモンゴですすす。ポネモンゴは、アメリカの福音派（エヴァンジェリカル）宣教団、バイブル・ミッションにカウペナの土地を与え、教会と小学校と診療所を建てさせた。アイエも小学校に通い、教育担当のミス・レニタことレニタ・バステインに愛された。

だが、独立の年、ウインディの家は何者かに放火され、怒ったウインディは妻の父で、この一帯最高の政治指導者ナウリガイ・トゥエポに土地を与えられ、アンブプル

村に一家をあげて引き揚げる。

アイエもアンブプルに戻りカウペナ小学校を卒業、同じ年の異母兄弟エンバが公立イアリブ中学に進んだため、バイブル・ミッション経営のパラフルル中学に進学する。

一九八五年、私はアイエの姉ククの夫サイモン・アペに招じられ、アンブプル村でフィールドワークを始め、老ウインディの敷地に家を建てる。

その年、学年第二位の成績で卒業したアイエは実家に帰り、私との「兄弟関係」が始まる。

しばらく、家でブラブラしていたアイエだが、ミス・レニタの口利きでニュージールランドの製材会社ビーチウッド・カンパニーに就職。爪に火を点もすようにコツコツと貯金に励んだ。

一九八七年四月、私のフィールドワーク終了直後、総選挙のキャンペーンが始まり、サイモン・アペは旧知のビジネスマン、アンソニー・テモの選挙参謀（キャンペーン・ミニスター）となり、現職のグライミー・ワレナに挑戦した。サイモンは見事テモを当選させると、大臣に就任したテモの秘書官となる。

アイエは貯めた金でPNG随一

の産業都市ラエのラエ・テクニカル・インスティテュートに入学、会計学を修め、トップで卒業し、ダンロップに入社する。

サイモンはテモのコネクションで、帰化白人ビジネスマン、ロバート・サックリングに紹介され、銀行から融資を受け、オーストラリアから古着を輸入し、売りに出すという古着ビジネスを始める。

サイモンの古着ビジネスは大当たりし、サイモンは財務を任せるため、アイエをダンロップから引き抜いた。

一九九〇年に開業したサイモンの古着屋は、一九九一年にはモレスビーに二店、一九九二年には更にラエとラバウルに二店と急速に拡大した。

そして、一九九二年。再び、選挙である。サイモンは今度もテモの選挙参謀を努め、テモを圧勝させるが、クリガイ氏族の若い娘とねんごろになり、二〇頭のブタと一万キナでめとつてしまった。激怒したのはアイエの姉のククであった。第二夫人は父もめとつているから許すが、自分の時の婚資（こんし）は三頭のブタと三〇〇キナである。この差別待遇は自分を辱めるものである。許せないククは、ア

アイエにサイモンの口座から二万五〇〇〇キナを引き出させ、アイエはポネモンゴ時代の竹馬の友ジョゼフ・フルノの口座に振り込んだ。

今度はサイモンが激怒する番だ。ピストルを空に向けて放つと、ククやアイエらウインディ兄弟を店から追放した。

アイエらは首都ポートモレスビーを路上生活して過すが、インボンク族文明第一世代のエレペ・コロウイ（離婚したウィワ・コロウイはPNG総督となる）の援助もあつて立ち直る。

アイエ、エンバ、サニのウインディ三兄弟は、ジョゼフ・フルノからの二万五〇〇〇キナを元手にビジネスを始める。万屋を建て商品を調達すると、再びエレペ・コロウイがダットサンを譲ってくれた。こうして商品調達をしながら、ビン缶収集も行い、店をもう一軒建てる。タイヤ・サービスと弁当屋（タツカー・ボックス）を始めた。毎日の食事は乾パン、鳥の股肉付きライスを食べるのは四週に一度である。仕事を始めるのは朝五〜六時、終えるのは夜の一〇〜一時であった。

そのうち、アイエはポートモレスビーの中下層の市民が朝食をと

らずに仕事に出かけていくことに気づいた。朝食をとるのは、自動車ですーパーマーケットに二斤入りのパンを買いに行き、自宅の大型冷蔵庫で保存できる上流層のみ。赤道直下のモレスビーではパンが傷むのは早い。

アイエの竹馬の友にして父方祖母の氏族ヌンブヌンブのジョセフ・プルノは、兄トロンベナが始めたスコーン（小型の丸いパン）・ビジネスのマネージャーとして、ニューギニア高地で成功を収めていた。

「あれやー！ アイエのアイデアは、中下層民が毎日生活物資を買いに行く万屋（トレード・ストア）や公設市場に安価なスコーンを配達して回るといったものだった。

アイエはこれまで築いてきた全ビジネスを売却し、銀行から一〇万キナを借り出し、巨大な倉庫を買い取り、ジョゼフにスコーン製造のノウハウを教わり、必要な機械と配達に必要な車を買入れると、全力をスコーン・ビジネスに傾注した。

スコーン一個は三〇トヤ（当時のレートで三〇円）。モレスビーの中下層民はアイエの供給するスコーンに飛びついた。

三台のパンはフル操業でモレスビー中の万屋や市場を回ったが、それでも足らず、更に二台のパンを買い足した。一台当たりの売上げは約五〇〇キナ、一日の総売上げは二五〇〇キナ（三〇万円）に達した。それでもまだ需要に追い付けないとみたアイエは、エンバにもパン工場を造らせ、双方合わせての売上げは一日四〇〇〇キナ（五〇万円）に達した。ポートモレスビー市民一五万のうち、一万人以上がウインディ兄弟の生産するスコーンを食べていたことになる。

アイエはこうしてシムペーターのいわゆる「新結合」を遂行し、中下層民の潜在的欲望に形を与え、すなわち潜在的需要に新商品を供給し、新市場を開拓したのだった。そして、それによる創業者利潤は莫大なものとなった。更

にいうならば、アイエは彼のスコーン・ビジネスを通じてポートモレスビー中下層民のライフスタイルをも変えていったのである。

### ● 族的資本主義と ビジネス・スピリット

資本主義発展のためには、マックス・ウェーバーのいうような勤労や禁欲の精神だけでは十分では

ない。シムペーターのいうような企業家精神（エンタープリナーシップ）が不可欠である。産業革命時代のスコットランドやイングランドの資本主義の英雄達、ワットやアークライト達にはみなぎる企業家精神があった。

アイエ・ウインディにも、市場のニッチを鋭く見抜き、そこに資源を総動員して賭に打って出る企業家精神が満ちあふれている。スコーン・ビジネスに追隨者が群がり出ると、次々と新機軸を打ち出していった（詳細については、参考文献①②参照）。

アイエのようなPNG人新興ビジネスマンは、ポートモレスビーのチャイニーズ・レストランへ行けば無数に出会うことができる（参考文献④参照）。

こうしたアニマル・スピリッツにあふれるビジネスマン達が、資源ブームに沸くPNGを資本主義へと推進させているのだ。

スコーン・ビジネスを始めたアイエのもとを訪れた私は「皆で、お祝いにチャイニーズ・レストランへ繰り出そうや！」ということ

で、アイエの車の助手席に座った。発進！ すると、やにわにアイエが口笛を吹き出した。何とペー

トーヴェンの第九の例の「歓喜の歌」だった。ペートーヴェンは偉大なかな！ 彼の代表作は、ニューギニア高地の文明第二世代の心をとらえ、その主題歌（テーマ・ミュージック）にしてしまったのだ。その口笛の音は族的資本主義の英雄時代の到来を告げるファンファーレのように、私の耳には聞こえた。

### 《参考文献》

- ① 塩田光喜「二〇〇〇」「ビジネスと福音—パプアニューギニアにおける都市文化の形成とその主体—」塩田・熊谷編『都市の誕生—太平洋洋島嶼諸国の都市化と社会変容』。
- ② 「二〇〇二」「ニューギニア高地における人生ゲームとしての階級間闘争」塩田編『島々と階級—太平洋洋島嶼諸国における近代と不平等』。
- ③ 「二〇〇六」『石斧と十字架—パプアニューギニア・インボング年代記』。
- ④ 「二〇一三」『PNGチャイニーズ今昔』アジ研ワールド・トレンド 七月号。